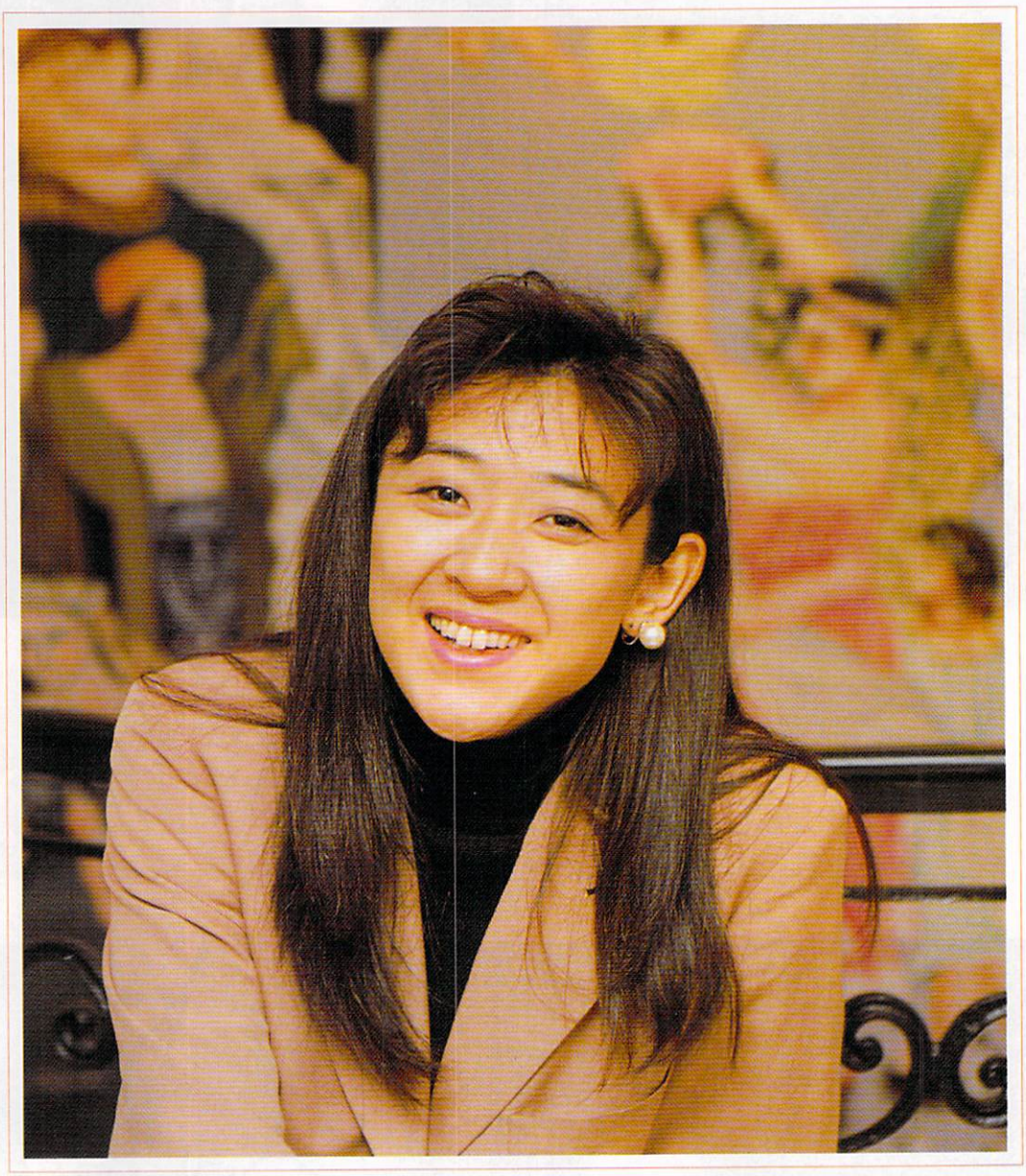

谷村志穂

居場所（ハウス）を求め都市を漂泊する心優しき隣人

『結婚しないかもしれない症候群』で一躍時代の寵児となり、
ミュージシャンとしてソロデビューも果たしたマルチクリエイター――
しなやかで強い、その素顔に迫る。

取材
今江ユリ
写真
柴田知子

「優しくて絵に描いたような幸せな日々に憧れながら、
自分のわがままのせいでうまくいかない……。
私自身ハンパなまま歩んできたから、主人公もそうなってしまう」。

〔スペシャルインタビュー〕

2年ほど前、『結婚しないかもしれない症候群』という本が登場した。これはベストセラーにもなったので、お読みになった方も多いに違いない。都会でバリバリ仕事をし、おもしろおかしく生活を楽しんでいる独身女性たちが、ふとひとりになった瞬間、「このままいったらワタシ、結婚しないかもしれない」と考える。

老後に対する不安から保険を何種類もかけてしまう女性、相手となかなか別れられない不倫中の女性、ひとり暮らしの孤独を紛らすためにノラ猫と平同棲生活をする女性、独身でがんばってきた女性たちのための老人ホームを作ることが夢という、女性ばかりの劇団のメンバー……。ここに登場する女性たちは、誰もが魅力的で、パワフル且つ健気に、怒涛のような現代社会を懸命に泳ぎ続けている。この本がベストセラーになった原因は、内容のユニークさは勿論だが、それ以上に著者の谷村志穂さん自身もまた、「結婚しないかもしれない」という予感と不安を抱えているという本音を包み隠さず書いた点にあり、それが巷の自立した独身女性たちの共感を誘ったのである。

「あれは最初、ある女性誌に寄稿した5ページほどのエッセイ風ルポルタージュだったのですが、反響があって〝本にしかないか〟という話が出たんです。当初は断っていたのですけれど、後で原稿を読み返してみると、どこか異様に切ないけれど、久しぶりに気持ち良く書けた原稿だったなと思えて。それで、いっそ出版するなら思い切り元気な本にしてしまおうと考え、ようやく実現できたんです」と、谷村さんは当時を振り返りながら語った。

札幌の大学で動物学者になることを夢みていた谷村さんは、大学院の入試に挫折し、東京の小さな出版社に就職先を見つける。活字に本格的に触れるようになったのは、出版社勤めを始めてからという。編集者としての仕事を続け、編集部の意向で原稿を書く仕事もこなしているうちに、やがて谷村さんが思っていることとは別の事を編集部の意向で書かなければならないという、不本意な事態に直面するようになってきた。そんな仕事に生理的に苦痛を感じてきた谷村さんは、再就職のあても無く退社。職安で失業保険は3ヶ月後でないと貰えないと初めて聞かされ、やむなくアルバイト生活に入る。

「家庭教師のバイト、ビデオ屋さんのスタッフ、それとパチンコにも通ったりして（笑い）、何とか食い繋いでいましたね。それから出版社にいる友達が見るに見かねて小さな仕事をくれるようになったんです。ホラ、マンガの下に〝一口メモ〟って、あるでしょ。あれ、一本書くと800円貰えるんですよ。100本書いたら8万円ぐらいだから、〝月に100本頂戴！〟と頼んで、そんなの書いたり、ビデオ情報とか書いたりしていましたね」

ライターとしての仕事が軌道に乗り、『結婚しないかもしれない～』のベストセラー。その後小説家に転身し、最近では音楽方面にまで活動の幅を拡げつつある谷村さんは、一見時流に巧く乗ることでトントン拍子に成功したラッキー・レディのように見えるが、そこへ辿りつくまでに色々と紆余曲折もあったようだ。その上、ベストセラーを出して売れっ子ライターの仲間入りを果たした後、様々な弊害にも見舞われた。新聞、雑誌から「結婚しない女の代表」として、取るに足らない些細なことでコメントを求められたり、抗議の手紙……。一時は外を歩くことも恐かったこともあったという。

「新聞や雑誌の主旨に賛同できなくて

SAN-AI.

ヘアーサロンからヘアーショップへの転身。それはスタイル提案を優先すればこそ、生み出されたキーワード・コンセプトです。
現実には不可能な位置にまで視点をおいて創造する、ハイパーでポジティヴなデザインは、アフターアワーズを遊泳できる人達にとって堪らぬ魅力となるに違いありません。
そんなSAN-AIのスピリッツは、カジュアルでそれでいてスタイリッシュな、レイアー・ショートから感じて頂きたい。

2階 NEW OPEN!!
貴方の感性求めています。
（スタッフ募集）

beauty SAN-AI
OPEN 10:00AM CLOSE 7:00PM 月・第3㊐休
075(256)2035
京都市中京区三条通富小路東北角

コメントを断ると、〝あんな本を出したからには、あなたにも責任がある〟と、反対に叱られたり、主婦の方から〝主婦をバカにしている〟とか、〝うちの主人が浮気しているのは、あなたのような女のせいだ〟とかね。若い独身男性からは〝おまえみたいな女がいるから、今の男は結婚できないんだ〟といった内容のものまでいただいて、大変でしたよ。でも、処女小説の『アクアリウムの鯨』を出した頃には、それもようやく落ち着きましたけどね」。その日の生活にも事欠く貧乏生活から、一気に恵まれたベストセラー作家としての生活に変貌したことで、谷村さんが得たもの、失ったものも多かったようだ。

ところで、かねてよりロックフリークであった谷村さんは、近頃音楽家として『ハウス』(日本コロムビア)というソロアルバムを発表した。これは同名の最新短篇集に基づいて作られた、音による小説といっても過言でない。短篇集『ハウス』は、居場所を失った12人の男女による新たなる居場所探しの物語である。それぞれの物語の主人公にとって最も居心地のよい場所――ハウスは、駅前広場の地蔵の前であったり、パソコンの画面であったり、多摩川の何の変哲もない土手であったりと、どれもがちっぽけで貧弱なものばかりだ。〝ホーム〟や〝ファミリー〟のように制度に守られた堅牢なものでない、このはかなげで危うい場所に辿りつくことで、徐々にアイデンティティーを回復していく孤独な都会人たちの姿が、淡々と、時にはリアルに描かれている。読み進むにつれ、どの主人公たちにも、『結婚しないかもしれない〜』に匿名で登場する不安の抱えた独身女性たちや、『十四歳のエンゲージ』(91)の不良になりたくてもなり切れない主人公、または短篇集『蜜柑と月』(92)の一連の登場人物の姿がオーバーラップしてくる。どうやら谷村さんが一貫して描き続けているのは、自分の居場所を探し求める孤独な人々の姿のようだ。一体何が、彼女をそんな人々を描き続けさせているのだろう。

「結局、私自身がそうだから、というのが原因だと思います。アルバムでも歌っている『アワ・ハウス』(原曲はC・S・N・&Y)の世界みたいに、優しくて絵に描いたような幸せな日々に憧れながら、うまくいかない。それはいつも自分のわがままのせいで……。だからといって、どう立ち向かっていったら良いのかわからない。私自身がいつもそうなので、ついそういう人物を主人公にしたり、ルポルタージュ記事にしても自分と似たような人を中心にしてしまうんです。『十四歳のエンゲージ』でも、不良グループの中心にいる子を主人公にすることも出来たのですが、私自身選択したのは、不良グループの周囲をウロウロしながらその中心に入り切れない子だった。これも私自身がハンパなまま歩んできたから、今ごろになって何か書こうとすると、こんなハンパな人を主人公にしてしまうんです」。

谷村志穂さんのその言葉の裏には、不安や恐れが見え隠れする。有名になっても、お金持ちになっても、現代の日本で女ひとり自立して生活していくには、まだ不安材料が多すぎる。老後の住宅事情、年金、環境問題……etc。いや、そればかりではない。彼女の描く不安や孤独は、パートナーの有無を問わず、いつの時代でも人間の心の奥に潜んでいる〝闇〟の部分ではないだろうか。故に、彼女の描く主人公たちの不安、焦燥感は、読む側に生々しく迫ってくる。彼らや谷村さん自身は、孤独な現代人の隣人なのだ。

今回発表したアルバム『ハウス』は、アコースティックサウンドを中心に、オリジナル曲と60〜70年代のロックの名曲(『アズ・ティアーズ・ゴー・バイ』、『ワイルドサイドを歩け』、『アワ・ハウス』など)を交えた、優しくもノスタルジックな仕上がりになっている。それは孤独な今を生きる人たちの子守歌であったり、密やかな応援歌であったりもする。

「十代の頃は、『十四歳のエンゲージ』にも描かれているように(もう解散していましたが)キャロルやクールスのファンだったんですよ、実は。ロックにのめりこんだのはもっと遅く、大学に入ってから。最初、ボブ・マーリィなんかのレゲエが好きになり、後からストーンズ、ザ・フーなど、ロック史のおさらいをするように聴いていきましたね。最近のアーティストではガンズ&ローゼスや、レニー・クラビッツなども聴きますが、やはり昔よく聴いていた音楽に戻ってしまうんですよね。アルバムでどうしても歌いたいと思って入れた曲は、私の青春時代ともダブって結果的にはその時代の曲ばかりになってしまったんです。これは私の考えですけれど、例えばドストエフスキーがいた頃のロシア文学とか、印象派絵画が隆盛の頃のヨーロッパ絵画とか、優れたものがある時代のある地域に噴出した時代って、ありますよね。ロックも〝ウッドストック〟の頃が最高だったと思う。あの時代の曲って、やはり古さを感じさせないんですよ」。

ゆくゆくは時間の許す限り、バンドを結成してライブ活動も展開してみたいという谷村さん。しかし自分の本業はあくまでも作家という。書くことの可能性を追求するため、今後どういったものを目指していくのだろうか。

「ルポルタージュはもうやらないと思う。ノンフィクションの方法が、基本的に私には合っていないと思うんです。私って、嘘をつきたくなる性分なんですよ。目の前にいる人がそう言ったかどうか、というより、彼らが考えているであろうということを私が感じ、その気持ちを書きたくなってしまうので、〝それだったらフィクションの方が早いや〟と思ってね。『結婚しないかもしれない〜』以前、随分小説とか書いて新人賞にも応募しましたが、軒並み落ちちゃって(笑い)。今は新人賞の選考委員の方より、読者に読んでもらえるものをずっと書き続けることできたらそれで良いと思っています。やはり読者って鋭いですよ。ちょっとでもサボると、すぐ手紙で叱ってくるし。でも処女作『アクアリウムの鯨』が泉鏡花賞の候補に選ばれたのは、正直嬉しかったですね。まあ、賞は貰えたらそれで嬉しいし、ダメだったら〝まあいいか〟という感じです。賞を獲れても本が売れなければ、そのうち出版してもらえなくなりますからね」。

インタビュー当日はあいにくの雨模様。谷村さんも風邪気味で前日まで39度の熱があってフラフラしていたというが、インタビューの時はひ弱なところを微塵にも見せず、和らかな語り口の中にもどこか芯の通った強さを感じさせた。最後に、京都についてどう思われるかをうかがってみた。

「京都は大好きな街で、年に4〜5回は訪れています。一番好きな所は、高山寺で、そこへ行ったらお茶を飲んで2〜3時間ボーッとして帰るだけなんですけれど、その時一番自分が日本人であることや、日本人が育んできた文化の素晴らしさを感じますね。日本人が、何らかのかたちで自国のアイデンティティーを問われた時、過去の文化を振り返る以外にないと思うんです。それが感じられる街が、私の知る範囲では、金沢と京都なんです。その国独自の文化がたくさん見える土地ほど魅力的に映るもので、そういう意味では京都はこの国の中でも恵まれていると思います。あと、京都の女性。物腰が和らかで一見華奢な印象の人が多いのですが、どこか芯が強いというか。特に40〜50代の女性にそれを感じますね。繊細にして強靭――京女とはまた一味違った強さを持つ彼女は、優しい声で、そう答えた。

谷村志穂

1962年、札幌市生まれ。北海道大学農学部応用動物学科卒業。上京後、出版社勤務を経て、フリーライターに。'90年『結婚しないかもしれない症候群』（主婦の友社）がベストセラーになり、注目を集める。その後作家に転向し、著書に『アクアリウムの鯨』（八曜社）、『十四歳のエンゲージ』（東京書籍）、『蜜柑と月』（角川書店）、『愛って何92』（主婦の友社）、『ハウス』（集英社）などがある。先頃、日本コロムビアよりアルバム『ハウス』でミュージシャンとしてデビュー。東京都在住。独身。